**太宰治**

　河口局から物を受け取り、またバスにゆられての茶屋に引き返す、私のすぐとなりに、濃い茶色のを着た青白いの顔の、六十歳くらい、私の母とよく似たがしゃんとっていて、が、思い出したように、みなさん、きょうは富士がよく見えますね、と説明ともつかず、また自分ひとりのともつかぬ言葉を、言い出して、リュックサックしょった若いサラリイマンや、大きいゆって、口もとを大事にハンケチでおおいかくし、まとった芸者風の女など、からだをねじ曲げ、一せいにから首を出して、いまさらのごとく、そのもない三角の山をめては、やあ、とか、まあ、とかけたを発して、車内はひとしきり、ざわめいた。けれども、私のとなりのは、胸に深いでもあるのか、他の遊覧客とちがって、富士にはも与えず、かえって富士と反対側の、山路に沿ったをじっと見つめて、私にはその様が、からだがしびれるほど快く感ぜられ、私もまた、富士なんか、あんなな山、見たくもないという、なの心を、その老婆に見せてやりたく思って、あなたのお苦しみ、わびしさ、みなよくわかる、とまれもせぬのに、共鳴のりを見せてあげたく、老婆にえかかるように、そっとすり寄って、老婆とおなじ姿勢で、ぼんやりの方を、眺めてやった。

（略）

ろうば

ろうば

ろうば

－28－

　老婆も何かしら、私に安心していたところがあったのだろう。ぼんやりひとこと、

ろうば

　「おや、。」

 　そう言って、細い指でもって、の一をゆびさした。さっと、バスは過ぎてゆき、私の目には、いま、ちらとひとめ見た色の月見草の花ひとつ、花弁もあざやかに消えず残った。

　三七七八の富士の山と、立派にし、みじんもゆるがず、なんと言うのか、とでも言いたいくらい、けなげにすっくと立っていたあの月見草は、よかった。富士には、月見草がよく似合う。